

平成23年度組織的な大学院教育改革推進プログラム
「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」
「キャリア形成のための院生自主企画」実施報告

I. 自主企画の内容

(1) 企画の名称

学校が仕掛けるつながりのデザイン

(2) 開催日時・会場

2012年2月18日(土) 13:30~15:30 文学部北棟 N215 教室

(3) 講演者

市橋 正己(摂津市立第四中学校 校長)

長年教職を務められ、摂津市教育委員会事務局教育総務部を経て現職。味舌小学校校長在任中、学校と地域を結び取り組み「未来のクリエイター支援プロジェクト」を実施。

山本 典子(摂津市立味生小学校 教頭)

長年教職を務められ、小学校教育に携わる。上記プロジェクトに教諭として関わる。

(4) 企画者

堀 文音(人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻人間関係行動学コース)

持塚 直子(人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻人間関係行動学コース)

小槻 智彩(人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻人間関係行動学コース)

落合 良香(人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻人間関係行動学コース)

柘植 彩(人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻人間関係行動学コース)

持田 有香里(人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻人間関係行動学コース)

八重 彩(人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻人間関係行動学コース)

山中 邦子(人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻人間関係行動学コース)

村田 紀子(人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻人間関係行動学コース)

辻田 奈緒子(人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻人間関係行動学コース)

(5) 支援教員

天ヶ瀬 正博(文学部人間行動科学科准教授)

(6) 参加人数

9名（内訳：[学内] 大学院生 8名，学部学生・研究生 1名）

(7) 自主企画概要

昨年の12月、同プログラムにおいて、『『生きる力』の教育は可能か？—現場のプロフェッショナルに学ぶ—』を開催した。学校と社会の間には、「学力の不連続」「人との不連続」の問題がある。子どもの教育は、学校だけで行われるものではなく、子どもたちの「生きる力」を育むためには、社会全体での取り組みが不可欠であることが議論された。

本企画では前回企画を踏まえて講師に教育現場でご活躍のお二人をお招きし、具体的にどのようにして学校・家庭・地域の連携をデザインしていけばよいのかを考えた。お二人の講師は、共に摂津市味舌小学校にて、学校、地域、企業が連携して子どもたちの学びを応援する、「未来のクリエイター支援プロジェクト」を成功させた経験をもつ。はじめにそのプロジェクトの事例を紹介いただいた上で、いま実際の教育現場では何が起きているのか。それを踏まえ、これから教師を目指す学生として、「連携」すなわち「つながり」というものをどう考えたらよいのか。また、新任教師として現場に立った時、どのような視点で物事を判断し、行動したらよいのか。参加者を交えた双方向のやりとりの中で議論が展開した。教育に関心のある大学院生 8名の他に、教職を目指す学部生 1名の参加があり、質疑応答ではひとりひとりの質問や感想すべてに先生方から丁寧な回答をいただいた。

< 参考 >

1. 平成 22 年度奈良女子大学院人間文化研究科組織的な大学院教育改革推進プログラム(人社系)
「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」自主活動支援企画キャリア形成のための院生自主企画 「生きる力」の教育は可能か？—現場のプロフェッショナルに学ぶ—
報告書 p.109～116

2. 未来のクリエイター支援プロジェクト

報告書 <http://www.senri.co.jp/imgs/solution/piyopiyotai.pdf>

II. 実施報告

1. セミナー内容

1.1 前回企画の振り返り

企画代表者から上述の前回企画『『生きる力』の教育は可能か？—現場のプロフェッショナルに学ぶ—』の振り返りを行い、その内容を参加者全員で共有した。

1.2 市橋正己氏と山本典子氏の講演（要旨）

東日本大震災以来、様々な場面で「つながり」という言葉が言われるようになった。しかし、このことは「つながり」をあえて言わなければならない時代になったことを意味している、と冒頭に市橋氏が述べられた。かつては口に出さなくとも共有していた「つながり」の認識



を、声高に呼びかけなければならない時代になったのである。このような「つながり」は教育現場においても、学校・家庭・地域の相互連携として明示され、新学習指導要領の改訂の大きな柱の一つになっている。それでは、具体的にどのように連携、すなわちつながりを考え、デザインしていけばよいのか。そしてこのつながりを学校がデザインしていくときにどのような視点が必要なのか。「学校が仕掛けるつながりのデザイン」について、教育現場でご活躍の市橋正己氏と山本典子氏からお話を伺った。

1.2.1 「生きる力」

「総合的な学習の時間」すなわち「総合学習」では子どもたちの「生きる力」を育てることが目的とされ、学校に求められている。しかし、教師が教えられるのは「教師として生きる力」だけなのでは、という問題提起が市橋氏からあった。教師として生きる力を教えることはできるが、すべての子どもたちが教師になるわけではない。銀行員や商店主として生きる力を教師が教えることはできない。ではどうするか。そこで、まずはそういった人たちと接することからはじめよう、という発想になったという。「生きる力」を学ぶことができるのは教室だけではない。学校の外、すなわち地域で本物に接することが「生きる力」の第一歩なのである。

1.2.2 地域との連携

市橋氏と山本氏が実際に学校と地域との連携を図った例が、小学3年生総合学習で行った「未来のクリエイター支援プロジェクト（ピヨピヨ隊）」である。当時、市橋氏は校長として、山本氏は学級担任としてこのプロジェクトに携わった。これは小学3年生の地域学習を、学校と地域が連携をとる中で行う取り組みであった。「生きる力」は学校の教室だけで身につけるものではない、地域で本物に接することがその第一歩である、という市橋氏の考えがここにある。また、山本氏のように学級担任としての視点からは、「子どもたちが楽しくて自分から踏み出していくような仕掛け」が必要になった。こういったことから、従来のような、子どもたちが商店街に行って取材をし、学校の中で発表をするという学習ではなく、自分たちで栽培し収穫した鳥飼ナスを持って商店街を回り、わらしべ長者のようにそれぞれの店の商品と交換していきながら「本物」に接していく、そのようなプロジェクトに発展した。

このプロジェクトを進めるにあたっては、内部の調整と外部との調整が必要になる。内部の調整は学校内での調整であり、子どもたちがその気になるような仕掛けをすることも含まれる。学

級担任としてこのプロジェクトに関わった山本氏には、子どもたちが商店街を回る際に持つのぼりの作成や歌など、子どもたちが楽しんで取り組めるように工夫された例を挙げていただいた。また、外部との調整とは地域との調整、すなわち連携である。校長として地域との連携を実現したのが市橋氏であるが、地域との連携を図るときに大切なのは「学校が本気でやっているかどうか」という。地域は学校全体で本気でやっているかを見ている。そこで学校が本気で一歩踏み出し続けることが相手を納得させることにつながるのである。

1.2.3 仕掛け

先に述べたピヨピヨ隊のように、学校と地域など、様々な組織をつなげて新しいプロジェクトをするには、タイミングと、各組織が「何とかしたい」という意識をもっていることが重要である。よい組織とはその中の人々が自然と役割分担できる組織だと山本氏は考える。市橋氏は、組織がうまくいくのに偶然はあり得ないともいう。つまり、「仕掛け」を造ることが組織において重要なのである。仕掛けなしの組織は、偶然で一過性のものにすぎず、よい組織を継続させるためには、仕掛けが必要である。その仕掛けは、気付かれないようにすることが大切である。例えば、学級という組織においても、教師は戦略的に仕掛けを造る。その時、教師は、子どもに気付かれないようにすることがポイントであり、教師の造った仕掛けの中で、子どもたちが「自らやっている」という意識をもてるようにもっていく。また、学校という組織においても、管理職として、教員の配置など、教員に対して気付かれないように仕掛けることが重要である。仕掛けというのは、諸刃の剣で、組織をよくする一方で、仕掛けに気付かれたら駄目になってしまう。そこで大切なのが、どのような仕掛けを造るかということである。校長が代わって学校がよくなるということに偶然はなく、そこには管理職による仕掛けが存在する。組織を経営する管理職は、仕掛けを造らずにいて、うまくいかないことを教員のせいにしてはならない。学級担任もうまくいかないことを子どものせいにしてはならない。仕掛けについては、色々な本が出ているが、自分の資質や実体験などにおいて自分にフィットすることを大切にしてほしい。そして、このような仕掛けを地域においても造っていくことでつながりを作っていくことができるのである。

さらに、仕掛けには先に述べたような意識的に造る仕掛けとは別に、日々行っていることが仕掛けになることもある。ピヨピヨ隊のプロジェクトに関して言えば、市橋氏はそれまで毎朝、子どもの登校の様子を見るために自転車で商店街の見回りを行っていた。プロジェクトとは関係のないところで行っていたのだが、結果的にこのことが商店街の人たちとの信頼関係を作るきっかけとなった。そして、プロジェクトを進めるにあたって地域との連携がスムーズに運んだ。これは日々の行動が「仕掛け」となった例である。

学校と地域の連携の中で行われた「未来のクリエイター支援プロジェクト」は成功を収め、形を変えながら今も小学校での恒例行事となっている。商店街側でも迷惑な部分もあったにもかかわらず、子どもたちが来た証のピヨピヨ隊シールを大切に貼っているなど、とても楽しんでもらえた。そして、商店街の方たちが子どもたちを見る目も、次の学年、また次の学年と変わってい

った。子どもたちにとっては、「何かをやった」という経験と思い出はすぐに活かされるものではない。だが、その効果が子どもたちの成長過程に必ず現れることを信じて、将来の日本をクリエイトする子どもたちを今現在において一生懸命育てようというのが「未来のクリエイター支援プロジェクト」である。「生きる力」は学校の中だけで育てられるものではない。学校が地域に仕掛けることによって、地域とのつながりが生まれ、その中で子どもたちが「生きる力」を身につけていくのである。

(文責：小槻智彩・持田有香里・八重彩)

1.3 質疑応答

1.3.1 学校と地域をつながり

○ 新任教師が絆やつなごりを広める方法

新任教師の場合はどうすればよいのかという質問に対して、「学校の中で自分の地位を一生懸命築きながら、地域のいろんな所へ出掛けて行き、地域の方とも知り合いになっていくことが重要だ」と山本氏



から返答があった。それを受けて、市橋氏は、「地域の人たちと掃除をしたとか、地域と一緒にイベントをしたとか、そんな活動はつながりではない。本当のつながりは、学校（という枠組み）を超えて（一人の人間として）地域とつながっていくことである。（そのためには、）さまざまな戦略を持って、周囲に『仕掛け』をして、目標を持って、一途にやっていくこと」が大切だと強調された。そうすると、それを周りが認めてくれ、その積み重ねで地域において何かができるようになる。そのような日ごろの「努力」と人を動かす「感動」があつてこそ、人がついてくる。そして、学校も信頼を受ける。学校と地域という単位でつながるのを待つ必要はなく、先生たちが自ら地域につながっていくことが重要である。

○ 地域と学校がうまく協働できない場合の調整の方法

地域と学校がうまく協働できない場合はどうすればよいのかという質問に、市橋氏は、「上手くいかない理由は、『本気じゃない』、それだけ。本気で取り組めばいろんな道が出るはず。」と述べられた。山本氏は、「つながりというのは、他の誰かに作ってもらうものではない。本当に学校が地域とつながって何かをしようというときには、地域の方たちが『隣の子』『地域の子』『地区の子』のことを本気で思ってくれていることが大切だ。」と述べられ、地域と学校それぞれが、「本気」で取り組むことの重要性を強調された。

○ 子どもたちと地域の人たちとをつなげることについて

行事では地域の方がどこか『ゲスト的な存在』のままで子どもたちとの実質的なつながりができにくいという懸念があげられた。それについて、山本氏は、「行事などはそういうもので、地域

の方はゲスト的であることが多い。ただ、いろいろな行事がある中で、子どもが一つでも自分にピンと来たものがあったら、今度は自分の足で自分の手で動き始めるようになる。一人一人が価値を見出すことこそ重要である。」と述べられた。市橋氏は、「地域の方との交流の行事でもいろんな裏話がある。あるおばあちゃんの所へ授業で子どもが行く機会があって、後日、腰の曲がったそのおばあちゃんが、お礼にと大きな座布団を縫って持ってきてくださった。涙が出るほどありがたかった。一つの行事をしたら、その陰でたくさんの小さな物語が生まれている。その物語が出てくることに効果があると思う。その物語を心に持って、一生を生きていく子どもも中にはいる。それを信じて教師生活を送っていただけるとありがたい。」と経験談を含めてお話下さった。また、「行事はきっかけだと思う。教育の中で、教師は、きっかけを作るだけで、子どもがそのきっかけをどう捉えるか、どう自分の人生の中につなげていくかはその子次第だ。だから教師は、いろいろな人に接するようにしてあげて、きっかけを作っていく。それが義務教育での教育のあり方だ。」という考えが示された。

1.3.2 学校と家庭のつながり

いわゆる「モンスターペアレント」への対応について、両氏の意見は「話をじっくり聴き、理解を示すこと」で一致していた。山本氏によれば、彼らの主張は「わかってほしい」という自己アピールであることが多い。それを理解して落ち着いて対応し、学校として曲げられないところは堅持しつつ、彼らの考えを「親はそうでも、子はこうかもしれない」という方向へ持っていくことが重要だという。これからの教師は、親の教育も担っており、親を教育することで子ども成長すると考えねばならないとうことであった。

1.3.3 学校と学校外の人のつながり

市橋氏は、あらゆる職種の方を学校に招き、子どもと一緒に給食を食べてもらった取り組みについて話された。そして、そのような取り組みの可能性として、「もしかしたら将来、あのときあんな人に会ったなという思い出が、子どもの何かに『つながっていく』かもしれない。」と述べられた。子どもの頃における地域の人たちとの接触経験が、その子の未来に「つながる」という視点があることがわかった。

1.3.4 教師をめざす人へのメッセージ

市橋氏は、「子どもたちは、今は逆らったり、ふてくされたりしていても、子どもたちの未来を信じて、教師が一生懸命やっていたら、必ずこの子にとって何か大切なことにつながっていくだろうという思いをかけるのが教師である。」と、教師をめざす参加者にメッセージを送られた。山本氏は、「ずっと教師をしていても、本当に私は子どものことが好きなんだろうか、とか思う時もある。けれど学校での子どもたちとのやり取りの中で、ある一瞬に子どもたちが素直な気持ちでパッとこちらに心を開いてくれることがあって、その瞬間によかったなと思える。教師は仕事の

成果が製品になって出てくるわけでも、成績になって出てくるわけでもない、目に見える形ではなく、自分自身でつかむその感覚だけがある。」と話された。

1.3.5 最後に山本氏と市橋氏からのメッセージ

山本氏からは「自分が感じた中で掴んだことだけが本物になる」とのメッセージがあった。市橋氏からは、つながりや絆という言葉が安易に使うことへの疑問が呈された。最近これらの言葉をよく聞くが、それをあえて言わねばならないのは不幸な時代である。絆という字は「糸と半分」、人と人が半分ずつの糸でつながっていること。人と人とが引っぱり合っている状態が「つながり」である。少しでも気を許せばたるみ、引っぱり過ぎると切れてしまう。人々が大変微妙なパワーバランスを維持することではじめて「つながり」になる。一対一のつながりを真に保っていくのは、非常な緊張関係のうえで可能になることだ。友人・親子・教師と生徒、どの人間関係においても、この真のつながり・絆が存在すべきである。べたりと寄り添うのはつながりではない。「糸に半分」を心に留めていってほしい、と市橋氏は話された。

(文責：柘植彩・落合良香・持田有香里)

2. 総括

まず、参加者については全参加者数が9名で、少数であったゆえに、前回企画からの課題でもある講師の先生方との双方向的で活発な議論が実現した。参加者全員が一度は発言し、自分自身の問題と引きつけながら疑問や感想を述べ、講師の先生方から意見をうかがうと共に、参加者同士で多様な視点を共有する良い機会となった。

講演は、両先生が実施した「未来のクリエイター支援プロジェクト」の事例を中心に行われた。学校だけの力では実現することのできないこのプロジェクトをどのように成功させたのか。そこには、教師から子どもたちへはもちろん、地域・企業への「仕掛け」が存在した。その「仕掛け」とは、プロジェクトに関わる子どもたち、地域の人々をはじめとするたくさんの方々が、自ら考え行動し、充実感を味わうことのできるような、主体的なつながりをデザインすることであった。この仕掛けは、一朝一夕で造られるものではない。人を動かすには、仕掛ける者の「本気」が前提であり、それなしには実現しないのである。本気の学校が地域・社会に「仕掛ける」ことによって、地域・社会とのつながりが生まれる。その中で、子どもたちは「本物」に出会い、「生きる力」を育てることが可能となる。教師を志す者として、また社会の



一員としての自分の役割と責任の自覚を促す講演であった。

この時間を通し知り考えたことを、参加者それぞれが自分の生きるステージに持ち帰り、行動に移すことこそが、本企画の成果といえるだろう。参加者の意識は高く、これからの展開が期待される。

(文責：堀文音・持塚直子)

アンケート結果

回答者： 7名

紙面の都合上、問いに対する回答のいくつかを抜粋し、報告する。()内は人数

Q1. 今日の講演に参加したきっかけは？	Q2. 今日のGP企画を100点満点で採点すると？
GP企画者から誘われて(6) 授業での宣伝(1)	100点(2) 95点(3) 90点(1)
Q3. 今日の講演を聴いてあなたが「つながり」について考えたことは？	
日々の小さな努力や一途な気持ち、本気さがかげがえのない「つながり」を生み出さうのだと改めて感じた/並大抵のことでは実現しないかもしれないが、実現したらかけがえのないもの/日々の小さな積みかさね・本気であることがつながりに/「つながり」と声に出して言わないといけない時代かもしれないけど、誰も言わなくなったら本当に終わりだと思うから、このような場で考えることでつながりが生まれ、広まっていけばと感じた/つながろうという気持ちが大切/最後の市橋先生の話聞き、今まで考えていた“つながり”はちょっと違っていた	
Q4. 今日の講演であなたが気になった(印象に残った)ことば・フレーズは？	
やっぱり「つながり」/“本気”(教師として志が大切だと感じた)/本気でやっているか・気づかれないように仕掛ける・教育をこえたつながり/仕掛け/「絆」は微妙な力、距離関係で保たれている・“つながり”を作るには本当に小さな毎日の積み重ねが必要・自分が体感したもの、フィーリングがほんものとなる	
Q5. 今日の講演の内容を伝えたい人は？ どなたに、どんなことを伝えたいと思いますか？	
教育に携わっている友人・“つながり”に関しては全ての友人へ/母親/共に働くことになる人/これから学校で教育に携わる人へ「つながる上での日々の積み重ね、そして本気でやること」	
Q6. 講演者・市橋正己氏と山本典子氏へ何か一言お願いします。	
将来先生になったとき、何か上手い“しかけ”をできる人になればと思う/現場のお話がきけたのがよかった(3)/自分ではすぐにたどりつけないであろう視点、考え方をたくさん示していただき、新しい気づきを得られた/現場でなんとなく仕事をするのではなく、子どもの姿、自分の言動をしっかりと捉え思い直しながら過ごしていくことの大切さを教えていただいた。きっちりとした心の中に信念・愛とかが大切だと感じた/現場でご活躍されている方のお話は説得力と貫禄があった。/お話しには実感と確信が感じられた。教育以外の所でも生かしていきたい	
Q7. 今日の講演についての感想	
厳しいけれどあたたかい先生ですね/「1回だけでは変わらない」「組織には仕掛け」「本物に出会う」等心に残ったことばを自分の中で消化していきたい/教師としてどうあるべきということもお話してもらい、よかった。保護者とのつながりという点で保護者とどう関わったらいいかも聞いてよかった/学生からの意見を受けながら、という形をとったことでより多くのものを得られたのではないかと二人のお話に圧倒されてしまった/プロジェクトも初めから自分たちが主体で作りあげることが本当に大変なことだと感じるのと同時に、それを実現させたのは、真剣な教育に対する熱意や日々の努力だったとお聞きし、根本はそういったもので間違いないとほっとした	
Q8. 今後このような企画があれば参加したいですか？どのようなテーマに興味がありますか？	
参加したい (7) 中高大・社会・地域との関わり/保護者間でのつながり/幼児教育の現場の実践/学校と保護者	
Q9. 企画の広報・宣伝について	
講義(教職関連)での宣伝(3)/大学HP/ポスター掲示(できるだけ早く)/門付近くに宣伝/他の企画と重ならないように	
Q10. 企画全体について、こうしたら良くなるのに…と思うことがあれば、教えてください。	
お話を伺うだけでなく、こちらからも話題提供ができれば/少人数であれば全員の意見を聞く時間があってもよい	